

精一杯生きよう

今年は戦後八十年の節目だとよく言われています。昭和二十年、一九四五年に戦争が終わったのでした。もっとも昭和三十九年、戦争が終わって二十年近くも経ってから生まれた私には、実際の戦争については知るよしありません。

それでもまだ幼い頃には、生家のすぐそばに防空壕が残っていました。廃墟となった屋敷跡に残っていたのでした。あそこに

は入ってはいけないうと親から言われていましたが、入るなと言われると入りたくなるもので、暗い防空壕に入って、こんな場所で空襲に耐えていたのだと思うと、なんとも言えぬ心地がしたものでした。

大きな神社や人の集まるところでは、まだ傷痍軍人さんの姿も見かけたものでした。白い服を着て、路上に坐っておられました。また、中国残留日本人孤児について、



精一杯
生きよう
よろこんで

円覚南願



円覚351号 目次

| | |
|--|----|
| 横田管長のお話 「精一杯生きよう」 | 1 |
| 管長のページ | 8 |
| 信心ことはじめ⑤⑩ | 10 |
| 明治居士列伝⑧／蓮沼 直應 | 12 |
| 夏の健康／桜井 竜生 | 16 |
| 羅漢講式 <small>らんこうしき</small> レポート～法要編～／横山友宏・由馨 | 20 |
| 精進料理レシピ／藤川 譲治 | 22 |
| 円覚寺の至宝⑩ | 24 |

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所



つくと周りの方が若いことに驚くようになりました。管長に就任して十五年が過ぎてしまいました。

どんなに時代が変わったとしても、変わるものがないものが、仏さまの教えであります。昔は、直接説法して伝えてきたのでした。その後經典などが木版で印刷されて多くの方が読んで学べるようになりました。最近では本を出版しては更に多くの方が教えに触れられるようになりました。書籍もありがたいことに管長に就任して以来、たくさん出さ

一九八〇年代には大きく報道されていました。残留日本人孤児とは、戦争の末期から終戦にかけて、旧満州(中国東北部)に取り残され、中国の方に養育されていた日本人の子どもたちです。一九八一年に残留孤児の肉親探しを目的とした日本政府による訪日調査が始まったのでした。当時はテレビや新聞で肉親との再会シーンが繰り返し報道されていました。しかし、それもいつしか見ることはなくなってしまいました。

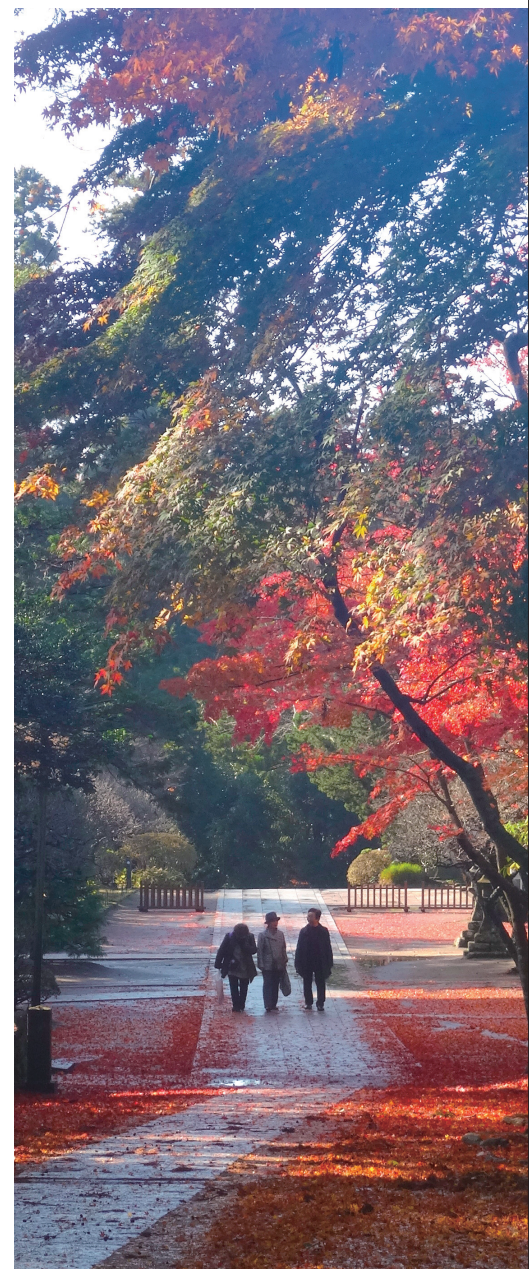
「降る雪や 明治は遠くなりにはけり」とは中村草田男の句です。この句は、昭和六年に草田男が母校の青南小学校を二十年ぶりに訪れた時に作ったそうです。昭和六年ですから、まだ明治時代が終わって二十年ほどしか経っていませんが、こんな感慨を抱

いたのです。

まだ大学生だった中村草田男は、変わらぬ母校のたたずまいに安堵しますが、雪が降り出すとともに校庭に外套を着た子どもが現れるのを見ました。自分の頃は、着物に下駄履きだったのにと、ずいぶん隔たりを感じて作ったと言われます。

私は今も修行道場で二十名ほどの若い者たちと一緒に暮らしています。もう昭和生まれは稀であり、ほとんどは平成の生まれなのであります。彼らと話をしていると、時として「昭和は遠くなりにはけり」と思うことがあります。

私は三十代で円覚寺僧堂の師家となり、四十五歳で管長という役目をいただいたので、いづどこに行っても「若い、まだ若い」と言われていましたが、この頃はふと気が



せてもらっています。

更にこの頃はインターネットもずいぶん
と広まっています。YouTubeという新しい
媒体を通して新たな布教も始めるよう
になりました。

かけがえのない身内と悲しい別れを体験
して絶望の底にあった方が、YouTubeを通
じて私の法話と出会われたそうです。それが
ご縁となって円覚寺にも足を運ばれて日曜

説教にも参加されるようになっていきます。

森信三先生が「悲しみの極みといふもな
ほ足りぬいのちの果てにみほとけに逢ふ」
と詠われていますが、このような思いをな
される方は今もいらっしゃるのです。

禅の教えで伝えることはただひとつ、あ
なたの心が仏であるということです。そし
て更に臨済禅師は、お互いのこの生身の体
に、仏の心がありありと現れていて、ご飯

を食べて排泄して、服を着て、夜眠るとい
うあらゆる日常の営みが仏法のすべてであ
ると説かれました。私はそんな祖師の教え
を繰り返しお話させてもらっているだけで
あります。

そんな話を聴かれた方から手紙をいただ
いたことがあります。

その方はご主人を亡くされてから、目が
見えず寝たきりの姑さんの食事やトイレの
世話などの介護を毎日なさっているそうで
す。そんな暮らしですので、思うように外
出もできぬと察します。手紙には「時々帰っ
てくる義姉にいろんなことを言われては、
悔しさや虚しさに耐え忍んでいる毎日です」
とも書かれていました。そのような方が
YouTubeで私の法話を聴いてくださった
のだそうです。

どんな人も仏の心をもっている、食べて
出して寝ている、この活動が仏の営みだと
話をしていきますので、私の話を聴いて「姑
を仏と思った」そうなのです。そうしまし
たら、「日々の世話が苦痛でなくなりまし
た」と手紙にかかれていました。そして「気
づきをあたえてくださり、本当にありがと
うございます。」という感謝の言葉が綴られ
ていました。ありがたいことであります。

またある方は、人生のさまざまな問題に
遭って、自ら死を考えるほどまで悩みなが
ら、円覚寺の日曜説教に参加されました。
その時に、「あなたの心が仏である」と話し
た私の一言が心に響いたそうなのです。そ
れ以来、前を向いて生きるようになり、今
も毎月の法話に通ってくださっています。

このことも、達磨大師がインドから中国

に渡って伝えられたことはただ「各自の心が仏である」という、禪の真理をお伝えしただけのことです。

いつの時代になろうと、人の苦しみは消えることはありません。生老病死の四つの苦しみは、変わることはないのです。平和な時代であろうと、老いる苦しみ、病の苦しみ、そして死を迎える苦しみは避けることができません。

「愛別離苦」という、愛しい人の別れもまた苦しみです。「怨憎会苦」という、憎い人と会わなければならない苦しみもあります。求めても得られない苦しみが「求不得苦」です。私たちの肉体と心のはたらきそのものが苦しみだ（五蘊盛苦）とお釈迦様は説かれたのでした。

苦しみのない世界がどこかにあって、そ

んな人のおかげを受けているので、少しでも何かお返ししてゆこうとすることです。永六輔さんは「生きているということは誰かに借りを作ること。生きていくということはその借りを返していくこと」と詠われました。松原泰道先生は、『日本人への遺言』という著書に「生きる意味とは何なのか？よくそんな質問をされますが、答えは実に簡単です。すべては他のため、自分のためではありません。」と書かれています。人はたとえベッドで寝たきりになったとしても、その生きているということが誰かの支えになり、力になります。何か大きな気づきをあたえることもできます。

先人たちの苦勞のおかげで今の戦争のない世を生きていくことができます。このことに感謝して精一杯生きなければと思います。

ここに行こうというのが仏教ではありません。この苦しみの中にあってどう生きるかを教えてくれるのが仏教です。真理を正しく観ることによってこそ、苦しみからの解放があります。

一切は苦しみであるというのも真理であります。すべてはうつりかわるというのも真理であります。今苦悩の中にあっても、人はいろんな人に出会い、言葉に触れ、教えを学んで、苦悩を悦びに変えてゆくこともできます。うつりかわるのですから、苦のままで居続けることもないのです。

人は一人では生きられないというのも真理であります。単独で成り立つ存在はないのです。いろんな人のおかげで生きていきます。

そして生きることの意味は、お互いいろ

